



車場の段

松 王丸 豊竹辰太夫
 梅 王丸 豊竹小松太夫
 櫻 王丸 (竹本おぼこ太夫)
 虎 王丸 竹本相壽太夫
 藤 原時平 竹本越名太夫
 野澤吉左

人形

松 王丸 吉田榮三
 梅 王丸 吉田玉幸
 櫻 王丸 吉田扇太郎
 虎 丸 吉田玉徳
 藤 原時平 吉田玉徳
 仕 丁平丸 吉田玉徳
 大ぜい

第一 菅原傳授手習鑑

車場の段
 寺入の段
 松王首實檢の段

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作でこの「寺子屋」は竹田出雲の作と傳へられてゐます。初演當時竹本座はこの淨瑠璃で異常な盛況を見翌年三月迄大入續であつたさいふ名作ですこの段の内容を申し上げます、菅公の御世繼菅秀才は芦生の里に寺子屋を開いてゐる武部源藏が我子の如くにして圍まつてゐます。源藏は今この妻戸浪と戀に落ちそのために菅公の

お館を勘當になつたのであるが菅公にその才能を惜しまれて、筆法傳授を受けた大恩は一身を賭しても忘れなかつたのです。この菅秀才のこさがいつか時平公の耳に入り、その首打つて渡せとの殿命をうけて源藏はさぼくそ我家へ歸つて見るさ一人今日入門した伶俐な子供があつた夫婦はお主のためには代えられぬその子の首を打つて身替りに立てた檢視の役は松王丸でありました。病にまぎらして咽ぶのも道理でその首の子は現在の我子、女房の千代と謀つてお主のため我子を犠牲に身替りに立てたのであります。松王丸の本心を見え、菅秀才は御壺と共に河内國へ落ちて行かれるさいふのですが哀音迫るいろは歌の野邊の送りには

寺入りの段
松王首實檢の段

竹本源路太夫
鶴澤友衛門
竹本文字太夫
野澤勝平

人形

女房 房千代 吉田文五郎
女房 小太郎 吉田文二郎
菅秀才 吉田文之助
下男 三助 吉田文之助
涎男 三助 吉田文之助
武部源藏 吉田文之助
春藤 支蕃 吉田文之助
舍人 松丸 吉田文之助
御臺 所丸 吉田文之助
百手 習子 大津

誰が臉にも涙を宿す親子恩愛の純情
美が流れてゐます。

(床本) 車場の段

程なく轟く車の音商人旅人も道をよ
きる時平の大臣が路次の行粧さなが
ら君の御幸の如く隨身青侍前後に列
し大路せばしと輾らせたり。兩人こ
かげを飛で出で車やらぬく立ふ
さがるヤア何者なれば狼藉する見れ
ば松王が兄弟梅丸櫻丸ム聞へた
主に放れ扶持にはなれ氣が違ふての
狼藉か但しは又此車時平公ぞ知つて
さめたかしらいでさめたかへん答次
第用捨はせぬさ白張の袖まくり上つ
かみひしがん其勢ひ梅丸丸ふせ笑ひ
へーへーハハハハハハハハハハハハ
いふな、氣も違はれば此車見ちが
へもせぬ時平の大臣齋世親王菅壺相

ざん言によつて御沈落其無念骨隨に
徹し出合所も百年めさ思ひもうけし
今日只今櫻丸さ此梅王牛に手なれし
牛追竹位自慢でくしひ肥た時平殿の
しりこぶら二ツ三ツ五六百くらばさ
れば堪忍ならぬ言はれぬ主のかた持
顔出しやばつて怪我ひろぐなヤア法
に過ぎた案内者アレぶちのめせ引く
くれさ供の侍聲ごえに前後左右に追
取り巻兄弟は事さもせず取つては投
退つかんではおち付けく投付ければ
あたり近付く者もなしへまてろふ
くまてろふやい) ヤア命しらすの
あばれ者いづれもおかまひ有な御
主人の目通り御奉公は此時節兄弟さ
一つでない忠義の働きお目かけん
コリヤやい松王が引きかけた此車さ
めらるゝならさめて見よヤイさ鼻づ

ら取つて引出す車ホ、ウ櫻丸梅王丸
 爰になくばいざしらす一寸なりこや
 つて見よヤイ車の内ゆるぐと見へし
 が現はれ出たる時平の大臣ヤア牛扶
 持ちくらふ青蠅めら轅にこまつて邪魔
 ひろぐば轅にかけて敷殺せヤア左い
 ふ大臣を敷殺さんと粹けし轅を銜々々
 提げ大臣を打んさふり上るヤア時平
 に向ひ推参なりさくはつと睨し眼の
 光り大千世界の千日月一度に照すが
 如くにて遠の梅王櫻丸思はず後へた
 ちく五体すくんで働かず無念く
 と計りなり何ぞ我君の御威勢見たか
 この上へ手向ひするご御目通りで一討
 と刀の柄に手をかくればヤア松王待
 々雁金巾子の冠を着すれば大君同然
 大政大臣さなつて天下の政を執行ふ
 時平も眼前血をあへすは社参の穢れ

助にくいやつなれ共下郎に似合松王
 が働き忠義にめんじて助けてくれる
 ハレ命冥伽なうづ虫めらウ、アハウ
 アハくくくくくくくくくくくくく
 いと邊ならんですいみ行ふり返
 つて松王丸よい兄弟をもつて兩人共
 に仕合せ者命を捨ふた有がたい忝な
 いと三拜せよさいはれて兩人くはつ
 させき上エ、おのれにも云分有れ共
 親人の七十の賀祝儀濟までナフ梅王
 ナ、其上では松の枝々切折つてかた
 きの根をたち葉を枯さんチ、それは
 此松王も親父の賀を祝ふた後で梅も
 櫻も落花微ちん足もこの明い中早く
 去れくくくくくくくくくくくくく
 ならはふかごつめ寄く兄弟三人互
 ひに残す意趣遺恨にらんで左右へ、
 別れ行く。

(床本) 寺入の殿
 一字千金二千金、三千世界の寶ぞこ
 教へる人に習ふ子の、中に交はる菅
 秀才、武部源藏夫婦の者、いたばり
 かしづき我子ぞこ、人目に見せて片
 山家。芹生の里へ所替、子供集めて
 讀書の、器用不器用清書を、顔に書
 く子そ手にかくと、人形書く子は頭
 かく、教へる人は取分けて、世話を
 かくぞと見えにける。中に年かさ五
 作が息子、詞コレ皆これ見や、お師匠
 様の留守の間に、手習するは大きな
 損、おりや坊主頭の清書したと、見
 せるは十五の漣くり、若君はおこな
 しく詞一日に一字まなべば、三百六
 十字この教へ、そんな事書かず共、
 本の清書したがいと、八つになる
 子に叱られて、エ、ませよくと指

さして、嘲戯かゝるを残りの子供詞
兄弟子に口過す、涎くりめをいがめ
てやごま、手ん手に壓尺ふり廻す自
然天然肩持つも、傳ふる筆の威徳か
や、主の女房奥より立出で 詞又コリ
ヤ例のいさかひか、おさましや／＼
今日に限つて連合の源藏殿、振舞に
往てなれば戻りもしれぬ。ほんに
／＼こなた衆で一時の間も待かれる
今日は取分け寺入もある筈、晝から
は休ます程に、皆精出して習ふた
／＼ソリヤ又嬉しや休みぢやま、
筆より先は讀聲高く詞いろはに、此
中は御人被下、一筆啓上候べくの、
男の肩に堺重、文庫机を荷ばせて、
例發らしき女房の、七ッ計りな子を
連れて、頼みませうと云ひ入る、
内にもそれと早悟り、こちへお入り

遊ばせと、云ふもしとやか、アイア
イと、愛に愛持つ女子同士、来た女
房は猶笑顔 詞 私事は此村外れに輕
うくらし居る者で御座りまする、
此腕白者をお世話なされて下さりよ
かま、お尋ね申しにおこしましたれ
ば、おこせ世話してやるま、結構な
お詞に甘へ、早速連れてさんじまし
た、内方にも御子息様もござります
げなむ、ごのお子で御座りますぞ。
アイこれが源藏殿の跡取りでござり
ます。コレハ／＼よいお子様や、外
にも大勢の子達、いかにお世話でこ
ざりませよ。アイ御推量なされてく
ださりませ、シテ寺入は此お子で御
座りますか、名はなんと申します。
アイ小太郎と申しまして、腕白者で
御座ります。イーヤイヤ氣高いよい

御子や、折悪う今日は連合源藏も、
振舞に参られました。これはマアお
留守かいな、お待ち遠なら私と呼び
にまぬりませう。いえ／＼幸ひ私も
参つて来る所があれば、其内にはお
歸りて御座りませう、コレ三助、其
持てきたもの、あなたの傍へあけま
せ。アツト答へて堺重、へぎに乗せ
たる一包、内儀の傍へさし出す詞こ
ればマア／＼云はれぬ事を、イヤお
はもじながら、此子が参つたしるし
此堺重は子達への土産、取ひろめて
下されませと、云はれど知れし蒸物
煮染、我子に世話を焼豆腐、つぶ推
茸の入たるは、奔走子とこそ見えに
けれ、詞これはマア何から何まで取
り揃へて、御念の入つた事、戻られ
たら見ませう 詞イヤモほんの心は

かり宜しうお頼み申し上げます、コレ小太郎ちよつと隣村迄いて来る程に、おさなしうして待つて居や、悪あがきせまいぞ、御内證様、往て參じましょ。お表へ出れば詞かく様、私も行きたいと頼り付くを、ふり放し詞嗜めよ、大きな形して跡追ふのか、御らうじませ、まだ頑是がござりませぬ。ソリヤ道理いな、ドリヤおばがよい物やりましょ、つい戻つてやらんせと、目で知らすれば、アイ、ついちよつと一走り、跡追ふ子にも引さる、振かへり見返りて下部

(床本) 松王首實檢の段

M 引連れ急ぎ行く。ギリヤこちの子近付きに、若君の傍に寄せ、

機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはりて色青ざめ、内入悪く子供を見廻し、詞エ、氏より育て云ふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立す、思ひありげに見えければ、心ならず女房立寄り、詞いつにない顔色も悪い、振舞の酒機嫌かは知らぬが、山家育は知れてある子供、憎体口は聞えも悪い、殊に今日は約束の子が寺入して居ります、さがない人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢つてやつて下されと、小太郎連れて引合せど、差俯伏いて思案の体、いたいに手をつかへ、詞お師匠様、今から頼み上げますと、云ふに思はずふりあをのき、きつと見るより暫くは、打守り居たりしが、忽ち面色

やはらぎ詞扱て、器量勝れて氣高い生れ付き、公家高家の御子息と云ふても恐らくはづかしからず、ハテ扱てそなたはよい子ぢやなアと、機嫌直れば女房も詞何さよい子よい弟子でござんしよ。よい共く上々吉、シテ其連れて來たお袋はいづくに。サアお前の留守なら其間に隣村迄いて來と云ふて。オ、それもよし、大極上、先づ子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され、それ皆おひまが出た、小太郎俱に奥へ、若君諸共誘はせ、跡先見廻し夫に向ひ、詞最前の顔色は常ならぬ血相、合點の行かぬと思ふた所に、今又あの子を見て打つてかへての機嫌顔、猶もつて合點ゆかず、どうやら様子がありさうな、氣遣ひな聞かしてご聞

へば源藏 詞オ、ウ氣遣ひな筈、今日
村の響應と傳り、某を庄屋の方へ
呼びつけ、時平が家來春藤玄蕃、今
一人は菅相 丞の御恩をきながら、
時平に従ふ松王丸、こいつ病者なが
ら見分の役と見え、數百人にて追取
巻、汝の方菅相 丞の一子菅秀才
我が子としてかくまふ由、訴人あつ
て明白、急ぎ首打つて出すや否や、
但し踏込み請取ふや、返答いかに
のつ引ならぬ手づめ、是非に及ばず
首打つて渡さうと請合ふた心は、數
多ある寺子の内、いづれなりとも身
おばりこ、思ふて歸へる道すがら、
あれか、これかご指折つても、玉簾
の中の誕生こ、菰垂のなか育つたこ
は似ても似つかず、所詮御運の未な
るか、いたはしや淺ましまこ、層所

の歩みで歸りしが、天道のひかへつ
よきにや 詞あの子を見れば、
萬更鳥を驚こも云はれぬ器量、一旦
身おはりで歎き、此場さへ過れたら
ば、直に河内へお供する思案、今暫
くが大事の場所と、語れば女房、待
んせや其松王と云ふ奴は三つ子の内
の悪者、若君の顔はよう見知つて居
るぞへ、サアそこが一かばちか、生
顔と死顔は相好の變る物、面ざし似
たる小太郎も首、よもや躰さは思ふ
まじ、よし又それさあらはれたらば
松王めを眞二つ、残る奴輩切つて捨
て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途
の御供と、胸をすゐたの、一つの難儀
今にも小太郎が母親迎ひに來たらば
なんさせん、此儀に當惑、さし當つ
たは此難儀 詞イヤ其事は氣づかひあ

るな、女同士の口先で、ちよぼくさ
欺して見よ。イヤ其手ではゆくまい
大事は小事より顯るゝ、ここによつ
たら母諸共。エ、イヤこりややい、
若君には替へられぬ、お主の爲を辨
へよと、云ふに胸すゐ、さうでござ
んす、氣よはふては仕損ぜん、鬼に
なつてご夫婦は突立ち、互に顔を見
合せて 詞で弟子子と云へば我子も同然
サア今日に限つて寺入したは、あの
子も業か、母御の因果か、報ひはこ
ちの火の車、追付け廻つて來ませう
と、妻も欺けば夫も目をすり、せま
じき物は宮仕へと、俱に涙にくれ居
たる。斯る所へ春藤玄蕃、首見る役
は松王丸、病苦を助くる駕乗物、門
口にかき据れば、跡には大勢村の者
つきしたがふて申上げます 詞皆これ

に在る者の子供が、手習ひに參つて居ります。若取違へ首討られては取返しがなりませぬ、どうぞお戻し下されど願へば玄蕃、ヤアかしましたい蠅虫めら、詞うぬらの伴の事迄、身共が知つた事が、勝手次第に連失うと、叱りつくれば松王丸、ヤレお待ちなされ暫くご駕より出るも刀を杖詞憚りながら拙者逆も油断はならぬ、病中ながら拙者めが見分の役務むるも、外に菅秀才の顔見知り者なき故、今日の役目仕終すれば、病身の願ひ御暇下さるべしと、難有き御意の趣き疎かにはいたされず、菅相丞の所縁の者、此村に置くからは、百姓共もぐるになつて銘々が伴に仕立て助けて歸へる手もある事、コリヤやい百姓めら、さばくさぬかさず共

一人宛呼び出せ、面あらためて戻してくりよと、のつ引させぬ釘、鏝、打てば響けの内には夫婦、兼て覺悟も今更に、胸轉かす計りなり。表はそれとも白髪の親仁、門口より聲高に、長松よくぞ呼出せば、オツミ答へて出てくるは腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ雪墨、之れではないと許しやる 詞岩松は居ぬかぞ呼ぶ聲に、祖父様なんぢやまはしくて出て来る子供のぐわんぜんなき、顔は丸顔木みしり茄子、詮議に及ばぬ連うせうと、にらみ付けられ、オ、こわや 詞嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落のがれしと、祖父が抱へて走り行く。次は十五の涎くり、ぼんよくと親仁が手招き 詞さよおれはモウ爰から抱れていのご、甘へる

顔は馬顔で、聲きりくすオ、泣くな、抱いてやらうと千鯉を猫なで親おくはへ行く 詞私お伴は器量よし、お見違へ下さるなと、断り云ふて呼び出すは、色白々々瓜實顔、こいつ胡亂と引さらへ、見れば首筋眞黒々々、墨かあざかはしられども、こいつでないと突放す、其外山家、奥在所の子供残らず呼出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が産した計り、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸浪も胸をすゑ、待つま程なく入来る兩人 詞ヤア源藏、此玄蕃が目の前で討つて渡そと請合ふた、菅秀才が首サア請取らう早く渡せと手詰の催促、ちつとも憶せず 詞から初ならぬ右大臣の若君かき首、れち首にもいたされず、暫

くは御用捨ご立上るを松王丸詞ヤア
其手はくはぬ、暫しの用捨ごまほど
らせ遣仕度しても、裏道へは數百人
を付け置き、蟻の這出る所もない、
生顔と死顔は相好ががかるなごい、
身代り御首それもたべぬ、古手な事
して後悔すなご云はれて、ぐつごせ
き上げ詞ヤア入らざる馬鹿念、病は
うけた汝か眼玉がでんぐり返り、逆
様眼で見やうはしらす、紛れもなき
普秀才の首追付け見せう。オ、その
舌の根の乾かぬ内に早く討て、さく
切れと玄蕃が權柄、ハツと計りに源
藏は胸をすゑてぞ入にける。傍に聞
き居る女房は、爰ぞ大事ご心も空、
檢使は四方八方に、眼を配る中にも
松王、机文庫の敷を見廻し詞ヤア合
點のいかぬ、先達つて行んだ餓鬼等

は以上八人、机の敷が一脚多い、其
俵はごに居るぞご、見咎められて
戸浪ははつご詞イヤこりやけふ初め
て寺、イヤ寺參りした子がござんす
何馬鹿な。オ、それく是が即ち、
普秀才の、お机文庫と、生地を隠し
た塗机、ざつごさばいて言ひ抜ける
詞なんにもせよ隙ごらす油斷の元ご
玄蕃諸共つツ立上る。こなたは手詰
の命の瀬戸際、奥にばつたり首打つ
音、はつご女房胸を抱き、ふん込む
足も、けしごむ内、武部源藏白臺に
首桶乗せてしづぐ、出で、目通りに
さし置き詞、是非に及ばず普秀才の御
首、討奉る。云は、大切ない御首
性根をすゑてサア松王丸、しつかり
ご檢分せよご、忍びの鏢元くつろげ
て、慮ご云は、切付けん、實ご云は

助げんご堅唾を呑んでひかえ居る
ハ、ハ、ハ、何んのこれしきに性根
所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か
金札か、地獄極樂の境、家來衆、源
藏夫婦を取巻きめされ、かしこまつ
たご捕手の人数十手ふつご立かする
女房戸浪も身をかため、夫はもごよ
り一生懸命、サア實檢せよ檢分ご云
ふ一言も命わけ、うしろは捕手、向
ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰
ぞ絶対絶命ご、思ふ内早や首桶引寄
せ、ふた引きあげた首は小太郎、實
ご云ふたら一討ちご、早抜きかける
戸浪は祈願、天道様、佛神様あはれ
み給へご女の念力、眼力光らす松王
丸、ためつ、すがめつ窺ひ見て詞ム
ウコリヤ普秀才の首打つたは、まご
ひなし、相違なしご、云ふに悔り源

藏夫婦、あたりきよろ／＼見あはせり。檢使の女番は見分の詞證據に、出かした／＼よく打つた。褒美にはかくまふた科ゆるしてくれる、イザ松王丸片時も早く時平公へお目にかけん、いかさま、隙どつてはお咎めもいか、拙者はこれよりおいさまたまはり、病氣保養いたしたし、オ役目はすんだ、勝手にせよま、首受取り、女番は館へ松王は、駕にゆられて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりしめ、ものを得云はず、宵息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹出す計りなり。胸なでおろし、源藏は、天を拜し、地を拜し詞ハア、有

難や添けなや、凡人ならぬ我君の、御聖徳が顯はれて、松王めの眼がすすみ、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所、御壽命は萬萬年悦べ女房詞イヤもう、もう大抵の事ぢやござんせぬ、あの松王が目の玉へ、菅相巫様がはいつてござつたか、但し首が黄金佛ではなかつたか似たま云ふても瓦と金、寶の華の御運開きと餘り嬉しうて涙かこぼれるハア、有難や尊やま、悦びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎ひき見えて門の戸叩き、詞寺入の子の母でござんす、今漸歸りましたと云ふ聲聞くより又恠り、一つ遁れて

また一つ、こりやマア何と、どうせうと、妻が騒げど夫は胸すゑ、詞コリヤ最前云ふたは爰の事若君にはかへられぬ、狼狽者めと戸浪を引退け、門の戸ぐわらり引明れば、女は會釋し詞コレはまあ、御師匠様で御座りますか、わるさをお頼み申します、ごに居やるぞお邪魔であらうと、云ふを幸ひ詞イヤ奥に子供と遊んでゐます、連立つて歸られよと、眞顔で云へば、詞オそんなら連れて歸りましょと、すつと通るを後より、只一討き切付くる、女もしれ者ひつげつし、逃けても逃さぬ源藏か、又するごに切付くるを、我子の文庫ではつ

しこうけ止め詞コレ待つた待たんせ

コリヤどうぢやこ、勿る又も用捨なく、

又切付くる文庫は二つ、中より

ばらりこ經帷子、南無阿彌陀佛の六

字の旗、あらはれ出しはコハいかに

こ、不思議の思ひに劔もなまり、す

ゝみかれてぞ見えにける。小太郎が

母涙ながら詞若君菅秀才のお身がは

り、お役に立て、下さつたか、まだ

か様子が聞きたいと、云ふに悔り詞

シテくそれは得心か。得心なりや

こそ此經帷子に六字の旗。ムウンテ

其許は何人の御内證と、尋る内に門

口より詞梅は飛び櫻はかゝる世の中

に、なにさて松はつれなかるらん、

女房悦べ、伴はお役に立つたぞと、

聞くよりわつこせき上げて、前後不

覺に取亂す、ヤア未練者めと吐りつ

け、すつこ通るは松王丸、見るに夫

婦は二度悔り、夢が現が夫婦かと、

呆れて言葉もなかりしが、武部源藏

威儀を正し詞一禮はまづ跡の事、こ

れまで敵と思ひし松王、打つて變つ

た所存はいかに、いぶかしさよと尋

ねれば、オ、御不審尤、存知の通

り我々兄弟三人は、めい／＼に別れ

て奉公、情なや此松王は時平公は從

ひ親兄弟とも、肉縁切り、御恩請け

たる昔相巫様へ敵對、主命とは云

ひ乍ら皆これ此身の因果、何ぞそ主

從の縁切らんぞ作病かまへいさまの

願ひ、菅秀才の首見たらば、暇やら

んぞ今日の役目、よもや貴殿は討ち

はせまい、なれども身がはりに立つ

べき一子なくんはいかやせん、爰ぞ

御恩の報する時と、女房千代と云ひ

合せ二人の中の伴をば、先へ廻して

此の身替り詞机の敷を改めしも、我

子は來たかこ心のめど、昔相巫に

は我性根を見込み給ひ、何ぞて松の

つれなからうぞこの御歌を、松はつ

れない／＼と、世上の口にかゝる悔

しさ、推量あれ源藏殿、伴わなくば

いつ迄も、人でなしと云はれんに、

持つべきものは子なるぞやと、云ふ

逢ひますわいのと取付て、わつと計
に泣き洗ひ、歎きもれて菅秀才、
一間の内より立出で給ひ、我に代る
さしるならば、此悲しみはさせまい
に、可愛の者やと御袖を、しぼり給
へば夫婦ははつと、俱にひたすら難
有涙、次手乍らに若君様に御みやげ
と、松王つゝ立ち詞申付けた用意の
乗物、早くくゝと呼ばるにぞ、ハツ
と答へて家來共、お目通りにかきす
ゆる、ハア御出でと戸を開けば、菅
相亟の御臺所、ノウ母様か我子か
と、御親子不思議の御對面、源藏夫
婦横手を打ち、詞方々御行衛懸れし
に、いづくにか御座なされし、サレ

バく北嵯峨の御隠れ家、時平の家
來の聞き出し召捕りにむかふと聞き
それがし山伏の妾さなり、危い所奪
ひ取つたり、急ぎ河内の國へお供な
され、姫君にも御對面、コリヤく
女房詞小太郎が死骸あの乗物へうつ
し入れ、野邊の送りさいなまん。ア
いと返事の其中に、戸浪が心得抱い
てくる、死骸を綱代の乗物へ、乗せ
て夫婦が上着をされば、あはれや内
より覺悟の用意、下に白無垢麻上下
心を察して源藏夫婦、詞野邊の送りに
親の身で子を送る法はなし、我々夫
婦が代らんこ、立寄れば松王丸詞イ
ヤくこれは我子にあらず、菅秀才

の亡体をお供申す、いづれもは、門
火門火と門火をたのみ頼まるゝ、御
臺若君諸共に、しやくり上たる御涙
冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋
迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、
賽の河原で砂手本、いろは書く子を
あへなくも、ちりぬる命是非もなや
あすの夜誰が添乳せん、らむうぬめ
見る親心、劔と死出の山けこえ合あ
さきゆめみし心地して、跡は門火に
ふひもせず、京は故郷と立別れ、鳥
邊野さして連歸る。



土佐町の段

口 豊竹辰太夫
 豊澤廣二
 豊澤新一郎

人形

女房お里 吉田文五郎
 講 中 大 ぜ い
 茶店亭主 吉田利男

第二 三十三所壺坂寺

土佐町の段
 澤市内より御寺迄

西國六番の札所大和國壺坂寺觀世音の靈驗を記した名人團平が妻女加古千賀女の筆になり、名人團平が一代の蘆菔を傾注して節付した名作であります。内容は澤市といふ座頭の女房お里の貞節を叙したものであります。壺坂寺の片ほそりに住む澤市といふ座頭は三つ違ひの美しいお里といふ女房を持つてゐたが、三年このかた毎夜のやうに家を抜け出して往くので澤市は隠し男があるやうに嫉妬します。實はお里は毎夜夜中に壺坂の觀音様へ参り夫の眼病平癒を祈つてゐたものでした。それと解つた

澤市は女房の貞節に泣いて厚い心に謝しました。所詮は癒らぬ眼病にいつ迄厄介かけるも壺坂寺の谷へ身を投げます。さかつけつたお里も夫の後を追ふて、ついでに身を投げます。その信心の厚さ女房お里の貞節に觀音の利益をたまひ、身は助かり澤市の眼があくといふ夫婦愛を高唱した絶好の世話もので御座ゐます。

(床本) 土佐町の段

機織りてかすかおろしておさまきて身にはつれをまごへ共心の錦おりかみ行儀も人の鏡ぞま貞女の噂日脚さへまだいさ高き八ツ下り土佐町はづれ並木松蔭茶の煙立障子休足所つりわらじ往來の人の足引もけふ縁日の觀世音参り下向に聲かけて茶店

澤市内より

御寺の段

切 竹本 鏝太夫

豊澤 新左衛門

ツ 野澤 勝三郎

人形

座頭 澤市 桐竹 政 龜

女房 お里 吉田 文五郎

観世音 吉田市 松

の嬢が呼さめテモ早い御參詣に花も
 丁度おあんばい休んでおいでござ
 出す花香もよしや吉野膳面々茶碗手
 にさつてチー檀三の嬢精が出来ますの
 ふ今日は十八日でたんさお参り定め
 て茶の錢が上りましょサイナア靈驗
 あらたな観音様のお影で世過をさし
 てもらふ有難いお恵みさ噂まぢ〜
 する處へ春の野もせの若草や寢よげ
 に見ゆる肌の色誰がつみそめし初よ
 めな手織着物のこなしよく歩み來る
 を信者は聲かけコレ〜澤市のお内
 儀ごこへ行かつしやるマア付合に休
 まんせチー是は〜皆様方けふは暖
 たか日和もよし定めて観音様へお参
 りでござりませふモウ私らは日がな
 一日糸を取るやら綿くるやらかせい
 でも〜追付ぬ貧乏ひまなしさいへ

ばこなたは打笑ひテモ澤市は仕合者
 お嬢の器量よい上に第一男を大切に
 お抱片手の貸仕事ア、逆もの事にお
 嬢の顔たつた一目澤市に見せたいわ
 いのチーそれ〜あつたら女房を谷
 間の櫻くらがりのぼた餅でアノ澤市
 は味知る斗りおしい事じや〜さほ
 めそやせばお里は涙あひに紛らしチ
 ホ〜、〜、皆さんの譯もない目か
 いこそ不自由なれわたしに過た澤市
 様まだ目の見へた時分から言號した
 大事の夫わしや嬉しいと思ふて居る
 成る事なら今一度あの目が明てあげ
 たいさほろりと落す一雫貞女の誠こ
 もらん人々も感じ入チー尤も至極
 や貞女かな器量がよけりや心込イヤ
 コレお内儀遠くもあらぬ壺坂の観音
 様を願はしやれこなたの貞女の届い

たら不思議の御利益目の當り随分信心
 心さつしやれやハイ〜有難ふはご
 さんすか賃仕事やら介抱やらで少し
 のひまもない私し又春永にゆつくり
 マチーそふさつしやれ〜やまこふ
 言内七ツ下りそろ〜内へ歸りませ
 うチー歸りませう〜内へ歸つて山
 の神にお里女郎の話しをして男を大
 事にする様にチー言てきかそ〜兎
 角目明の亭主さへ氣儘氣すいの買
 らひ小使錢の出入り目くらに仕おる
 め銘々か仇口〜に右左お里も會釋
 笑顔別れ〜て在所道我家をさして
 歸りゆく。

(床本) 澤市内の段

夢も浮世か浮世も夢か夢てふ里に住
 なむら住ば住なる世の中によしあし

びきの大和路や壺坂の片邊り土佐町
 に澤市さいふ座頭あり生れ付たる正
 直の琴の稽古や三味線の糸より細き
 身代の薄き煙りの管みに妻のお里は
 健やかに夫の手助け賃仕事つれさ
 せてふ洗濯や糊かいものを打盤の音
 も幽のくらしなり鳥の聲鐘の音さへ
 身にしみて思ひ出す程涙む先へ落て
 なむるゝ妹脊の川をチー是は〜澤
 市様けふは何さ思ふてやら三味線出
 してよい機嫌じやのホー、チーお里
 かそなたアノおれが三味線弾をよい
 機嫌に見ゆるかやアイナアハテナア
 おりやそんな氣じやないわいのモウ
 〜〜〜氣が詰つて〜〜〜いつそ死で
 ものけふエーイヤサアノ死んで仕廻
 程氣がふさいでならぬわいのふイヤ
 コレお里わしやそなたにチト尋れた

い事がある。マア〜下に居や〜
 ハテ扱下に居やいのふ外の事でもな
 いかいつぞは聞ふ〜さ思ふて居た
 が丁ご幸ひ光陰矢の如しとやら月日
 の立ばマ、早いものなアソレわがみ
 さおれがコウ一所に成てからモウ三
 年稚い時より許嫁互に心も知つて居
 るにマなぞ其様に隠しやるぞさつげ
 りと打明て言てたもさ何處やら濁る
 詞のばしお里は更に合點行かずふし
 んなからにコレ澤市様そりやお前何
 を言しやんす嫁入してから三歳のお
 いだもほんに〜露程も隠し立した
 事はござんせぬが夫共に何ぞ又お氣
 にいらぬ事有ば言て聞して下さんせ
 サそれが夫婦ぢやないかいなム、そ
 ふ言やればこつちも言はふチー何成
 共言しやんせチー言ばいでかコリヤ

お里マよふ聞けよわれと夫婦になつて丸三年毎晩七つから先寢所へ手をやつても終に一度も居た事がないソリアもうおれは此様な盲豚にゐらい疱瘡でも見る影もない顔形ごふで我の氣に入ぬは無理なられど外に思ふ男が有らばさつぱりご打明けて言ふてくれたら此様に何の腹を立ふぞい尤もわれとおれとは従弟同士専ら人の噂にもアノお里は美しい〜ごモ聞度事におればもふよふ諦めて居る程に格氣は決してせぬぞやコレごぶぞ明して言てたも立派に言へご目にもるゝ涙吞込盲目の心の内ぞせつなけれ聞にお里は身も世もあられず縋り付てエーソリヤ胸忿な澤市様いかに賤しい私じやさて現在お前を振り捨てゝ外に男を持つ様なそんな女

ご思ふてかソリヤ聞へませぬ〜エ聞へませぬわいなモ父様や母様に別れてから伯父様のお世話になりお前さ一所に育てられ三つちがいの兄さんさいふてくらして居る内に情なやこなさんば生れも付ぬ疱瘡で目かいの見へぬ其上に貧苦にせまれど何のその一旦殿御の澤市様たさへ火の中水の底未來迄も夫婦じやと思ふ計かコレ申お前のお目を治さんご此壺坂の観音さまへ明けの七つに鐘を聞きそつと拔出で只一人山路いさばず三年越せつなる願ひに御利生のないさはいか成報ひぞや観音様も聞へませぬさ今もいまさて恨んで居たわしの心もしらすして外の男も有る様に今のお前の一言は私ばげら立わいのさくごき立たる貞節の涙の色ぞ

誠也始て聞し妻の誠今更何ぞ澤市が訛の詞も涙聲アコレ女房共何にも言はぬ堪忍してたも誤つた〜くわいのふモウそふさばしらすかたわの癖に愚痴計りコレこらへてたもれさ斗にて手を合したる諸淫袖や袂をひたすらんアコレ連添女房に何の訛お前の疑ひ晴たれば私しや死んでも本望じやわいな〜イヤモウそふ言てたもる程わがみの手前面目ないわいのふが夫程に迄信心してたもつてもおれが此眼はコレマ治りはせぬかいのエーソリヤア何を言はしやんすぞいな此年月のうき艱難雨の夜雪の夜霜の夜もいさばぬ私かばだし参りも皆お前の爲じやぞへサア夫程に祈誓をかけ願ふてたもつた志有がたい共嬉しい共其貞節なそなた

かふて来る事は来ても中々に此目は
治りそふなこそはないわいのふエ、
此人はいのふ又してもくそんな事
コレ此壺坂の観音様むかし桓武天皇
様奈良の都にまします時眼病にて御
惱み夫故に此観音様へ御立願なされ
た時早速御眼が明いたげな夫故お前
に勧めるもハテモウ天子様じやさい
ふたさてたさへ虫けらの様な我々で
もあなたに隔てばないはいなモ兎角
信心さいふ物は氣を長ふ歩みを運ん
で心を鎮め一心にお縋り申せば何事
も叶へてやるさのお慈悲じやはいの
ふそんな事をいふ手間で早ふお唱へ
申ませふさ力をつくれればいかさまの
ふほんに言やれば其さほりそんなら
わしは今宵から三日の間爰に斷じき
する程にそなたは早ふ内へいんで何

かの用事仕廻ておじや治るこも治ら
ぬ共此三日の間か運定めチよふい
ふて下さんしたそんなら私も内へ歸
り何かの用事片付て來ませうかコレ
澤市様此お山はけはしい山みち殊に
坂を登て右へ行けば幾何丈さも知れ
ぬ谷間じや程にコレかへまへてごつ
こへもチーごへ行ふぞ今夜から觀
音様と首引じやアハハハハハハハハ
と笑ながらに女房も後に心ば置露の
散てばかなき別れ共しらでごつかは
急ぎゆく後に澤市只一人ころへし胸
のやるせなくかつご伏して泣居た
るコレ嬉しいぞや女房共此年月の介
抱其上に貧苦にせまるもいさひなく
只の一度も愛想盡さすあまつさへ目
かいの見へぬ此身をば大事にかけて
たもる志それさもしらず色々の疑

立てコレ堪忍してたも、今別ては
いつの世に又あふ事の有べきか不便
の者やいぢらしやと大地にごふさ身
を打伏前後ふかくに歎きしが漸々顔
を上げア、歎くまい、三年の間女
房が信心凝して願ふても何の利益も
ないものをいつ迄生きても詮ない此
身世の謬にもいふ通り退げ長者も二
人のたさへわしが死のがそなたへ返
禮生きながらへていづれへ成さよき
縁付をしてたもやヤム、最前聞け
ばアノ坂を登りて右へ行ば幾何丈共
しれぬ谷間この事は究竟の最期所。
かゝる靈地の土さならば未來は助か
る事もあらんム、幸に俺は更たり人
なき中にチーそふじやくと立上り
亂るゝ心取直し上る段さへ四つ五つ
早曉の鐘の聲、イザ最期時いそが

んこ杖を力に盲目のさぐりくへ漸々こなたの岩にかき上ればいこもすきき谷水の流れの音もどうんく響くは彌陀の迎ぞこ杖を傍に突立てなむあみだ佛も諸共はがほこ飛込身の果は哀成ける次第なり。かゝる事ども露しらすいせき道より女房が取て返すこ氣はそゆる常に馴にし山道もすべり落やら轉ぶやら漸々登る坂の上ヤアコリアコレこちの人が見へぬわいな澤市様くいのふ澤市様のいふと尋ね廻れど聲だにも人がげさへも見へざれば、あなたへうろくこなたへ走り澤市様のいふくこ爰かしこ木の間をもるく月影にすかせば人が物ありと立寄り見れば覺の杖ハツト驚き遙かなる谷を見やれば照月の光りに分つ夫の死骸ハアこ

りやマアどふせう悲しやと狂氣の如く身をもだへ飛をりんにもつげさなく呼べど叫べど其からもこたふるものは山彦の既より外なかりける。エいこちの人聞へませぬくくはいな此年月の艱難もいさばぬ私が辛抱はな只一ト筋に觀音様へ願込めて、どうぞ早ふ眼の明きます様お助けなされて下されと祈らぬ間逆もないものわけふに限つてこのしだら後に残つて私しやまあどふなるぞいなアどふせふぞいなくくくくア、是を思へば最前に諷けしやんしたアノ歌はどふやら心にかゝつたが今で思へば其時に死る覺悟で有たのかエ、しらなんだくくわいな斯言ふ事なら何のマアお前を無理に連れて來ませふ堪忍して下さんせくくほん

に思へば此身程はりないものが有かいな二世を契りし我夫に長いわかれさなる事は神ならぬ身の淺ましやかる憂目は前の世の報ひか罪かエ、情なや此世も見へぬ盲目のやみより闇の死出のたび誰か手引を仕てくれふ迷はしやるのを見る様でいさしいわいのさかきくごきくごき立く涙は壺坂の谷間の水や増るらん。漸々涙の顔を上げマ、悔むまい歎くまい皆何事も前の世の定り事と諦めて夫と俱に死出の旅マ思へはかたみの此枕を渡すは此世を去てゆく行先導き賜へや南無阿彌陀佛みだ佛の聲諸共に谷間へ落てばかなき身の最期貞女の程こそ哀れなり。頃は二月中ぞらや早や明け近き雲間よりさつこ輝く光明に速て聞ゆる音楽の音も妙

なる其中にいこもけ高き上臈の姿を
假に觀世音微妙の御聲うるはしくい
かに澤市承はれ汝前生の業により
盲目となつたりしかも兩人なむて今
日にせまる命なれ共妻の貞心又は日
頃念する功德にて壽命を延し與ふべ
し此上はいよく信心渴仰して三十
三所を順禮なし佛恩報謝なし奉れ
コリヤお里く澤市くま宣ふ御聲
諸共にかき消す如く失賜へば早や晨
朝の鐘の聲四方にひびきて明け行く
空ほのくくらき谷間には夢さも分
かぬ二人さもむつくこ起てヤアこな
たば澤市様アコレこちの人お前の
眼が明いて有むなエアノほんにコ
リヤ眼が明いて有るチ、眼が明た
くくくくくく眼が明たチエ

観音様のおかけ有難ふござります
くくくくくわいのふム、そし
てアノお前はマアどなたじやへどな
たさは何ぞいのコレ私はお前の女房
じやはいなエ、アノお前がわしの女
房かへコレハシタリ始めてお目にか
りますア、嬉しやく夫に付ても
ふしぎな事まさしくわしは谷へ落ち
死たと思ふて何にも知らぬ其内に觀
音様がお出なされ前生の事細々ご御
しらせサイナア私もお前の後を追谷
へ落たに違はないが身内に一つも疵
付かず其上お前の眼は明ホコリヤマ
ア夢ではないかいなム、そんなら今
澤市くさおつしやつたがコリヤ觀
音様が直々にお呼び生け下さいまし
たに違ひはないハ、ハ、ア有がたや

忝けなや是より直ぐお禮參りは浮木
の龜始めて拜む日の光りは年立かへ
る心地ぞや是ぞ誠に觀音の御利生有
りけるや、見へぬ眼も見へ明らかに
有むたかりける新玉の年立歸る如く
にて水も洩さぬ夫婦の命も助かりけ
るは誠に目出度うさふらひけるけう
は嬉しやく枕を納めて折しも朝の日の
目を拜んでお禮申すや神や佛萬見せ
賜ふは是偏に觀世音これ偏に觀世音
の誓の重きは岩を建水をたへて壺
坂の庭いさごも淨土なるらん御しめ
し有難かりける御法なり。



第三 夏祭浪花鑑

三婦内の段より

長町裏の段まで

三婦内の段

切

竹本相生太夫
豊澤猿糸

人形

釣舟の三婦 桐竹政龜
團七九郎兵衛 吉田榮三
一寸徳兵衛 桐竹門造
女房お辰 桐竹紋十郎
女房お次 吉田小兵吉
玉島礎之丞 吉田光之助

この淨瑠璃は延享二年七月竹本座に上演されたもので三婦内の段は六段目で大体の筋合は元祿十一年歌舞伎に演じられた『宿無團七』を藍本としたものであります。泉州濱田の家の中玉島兵太夫の息子磯之丞が乳守の遊女琴浦に夢中になつて勘當になり團七が世話をする。團七は兵太夫と同家中の大島佐賀右衛門の家來に傷を負はせた爲めに相手双共入牢の身となつたのを兵太夫の扱ひで出牢した恩義からであります。磯之丞は團七の世話で道具屋へ手代に住込むこ

主人の娘さ戀に落ち番頭の嫉妬仲買彌市の殺害、團七の女房お梶の父儀平次の騙りから起る五十兩の引負等の爲めに大阪にも居られなくなり死なうとしたのを釣舟の三婦に助けられ其家に匿まはれてる處へ一寸徳兵衛の女房お辰が訪れて来たので三婦は之に頼んで備中玉島へ落してやり琴浦も後から遣らふこしてゐるこ、豫て琴浦に懸慕してゐる大島佐賀右衛門に頼まれて團七の舅、義平次が團七の名を騙つて琴浦を奪ひ取ります。後で之を知つた團七は舅の後を追つて取り戻そうと馳け出します。これまでが三婦内の段で、長町裏へ追ひ付いた團七がそこで欺して義平次から琴浦の乗つてゐる駕を取り戻し其金の経緯から遂に義平次を殺す

琴浦 吉田文作
儀平次 吉田玉松
こつばの権 吉田玉市
なまこの八 吉田市松

長町裏の段

九郎兵衛 豊竹つげめ太夫
義平次 竹本鏡太夫
野澤勝市

人形

九郎兵衛 吉田榮三
儀平次 吉田玉松
踊り子 大ぜい

さいふのが長町裏の段になつてゐます。世話物にて九段續きさいふ長ものはこれが始めて、また人形に帷子衣裳を用ひたのもこれが嚆矢であります。

(床本) 三婦内の段

鹿ナドリ 賑しき、浪花高津の夏神楽
練り込む振り込む擔ひ込む、てうさ
ようさの伊達提燈、門のそろへは地
下町の、しるしを見世に伊豫簾、並
ぶ家居の其中に、釣船の三婦の家。
客は内證預りの、乳守の太夫琴浦と
結び合ふたる磯之丞。見世を揚屋の
祭見に、口説しかけて拗れ合ふて、
ほむらの煙管打たき、煙くらべの
びんしやんば、火皿も湯になるばか
りなり。三婦の女房は料理拵へ、火
鉢に掛けて焼物を、燻ぐ片手に、コ

レ琴浦さん。詞まうよい加減に仲直つたらよかるうがの、道具屋の娘お中殿さやらを、三婦殿が送つて行たも、憎氣しんきな顔がいやさに、夫に何ぞやふしくたやうに、お前も粹のやうにもない。男に勤奉公をさしたまと思ふたがよいわいなさ、挨拶すれば。詞ア、おつきさんのいはんす事はいの。お中ごのさ心中に出た清七男仲直つたさて面白うもござんせぬ。じたい娘の有る内へ、奉公にやらんした、九郎兵衛様か聞えませぬアコリヤ九郎兵衛に恨み云ふ氣なら此清七男にいへ。三婦の世話してたもるのも、九郎兵衛の頼みから。サ其恩ある人を恨みさするはお前のわざ。いふなやい、据膳ご河豚汁を食はぬば男の内ではない。ソレ其口が

猶憎く、せせり合ふ中へ主の三婦
 數珠爪繰つて門口より。詞女房ども
 今戻つた。祭の料理出来であるか
 内入よきにおつきもほれ。詞出
 來である。あつらへの饗の焼物
 摺りたて汁にかは。ナツト夫で喰
 へる。シテ道具屋の娘女は戻し
 て來てか。ハテ人の大事の娘かどは
 かしたさいはれては、礎殿の男も立
 たぬ。首縊つた傳八めに何もかも買
 ふせ、金の事もさらりと濟み、仲買
 の彌市を殺した事は、彼の書置でし
 てやつたと思ふたか、いやな風説が
 ある。お二人も聞かしてませ。其書
 置の手が傳八の手でないか一門ごも
 がいひ出だし、御詮議を願ふさの噂
 スリヤ礎之巫様を大阪の地には置か
 れまいと、九郎兵衛もいふ。おれも

思ふ。マア當分立退かす相談といふ
 て、あてどなしにやられもせまい、
 よつぼどなげんびき、マア端近へ出
 て人に顔見せるもわるい。殊に琴浦
 殿は、目がける奴のある身の上。女
 房ども、女房共、なげ表へ出します
 るぞと、叱りまはせば、ソレ見さん
 せの、榮耀らしい格氣所か、事によ
 つたら二年三年、わかれ。ござる
 もしれぬ、暇乞と仲直りの汗を一度
 にかいておかんせ。うちん。せす
 琴浦様、つれまして去かんせと、粹
 な女房の挨拶も、よい折れ口と。コ
 レ礎様、いふ事かたんさある、サア
 ござんせと手を取れば、ふいと振り
 切り、不行儀せまい。詞三婦が吃さ
 見てゐやるさ、おどけをしほに二人
 連手を引き合ふて入りにける。ドリ

ヤ焼物を焼立て、祭しんじよこ立
 つ女房。表へ二十六七な所目馴れぬ
 笠の中、そこが爰かき見廻して。詞
 下り荷物の世話なさんす、三婦さま
 さいふお方は、爰らではないかへさ
 間ふ門口より。爰でござんす、ごな
 たじや。私じや。私さへ。チよ
 うござつた、アリヤ徳兵衛のお内儀
 じや。是はしたり、サアマア此方へ
 と挨拶を、馴染にして打上り。三婦
 様には先程九郎兵衛様でお目に掛り
 何かのお禮を申しましたか、お前に
 は始めて、私は備中の玉島にをりま
 する辰と申して、徳兵衛女房でござ
 んする。これは。よくよう上らんした
 なサ。アイマア配偶徳兵衛殿。こは
 僅な科に國を立退かれました、和泉
 さやりに居られましたを、皆さん方

お世話にして、暫く大阪の住居。生れ付があらこましい喧嘩さいへば一番かけ、はだ刀さいたやうな人、定めて何かお世話がちこ、一禮いへばア他所がましい何のお禮。詞イヤもうあらこましい何方も覺えのある事。手前の人十五六年以前迄は、夫はく喧嘩好きでな、苟且にもちよつと橋詰へ出て貰を毎日毎晩、夫も亦直れば直るもの、今では蟲も踏殺さぬ佛性。アレ彼のように片肢も數珠を離さず、腹の立つこがあれは念佛で消して參られます。嬢かいふ通り常住これじやく。ハテナア夫は結構なこご、イヤお内儀、徳兵衛も同道で下られますか。サイナア女房の思ふやうにもない、聞いて下んせ。お國の咎めも赦りて迎ひに来

たを、ヤレ嬉しやさいふ氣も無うてマア四五日も後から下り、先へ下れさひつしよなさ。未練さうに付はつてもあられす。是非なう先へ下りますと、話の中に三婦が女房、思ひ付いたる一つの頼み、云ひ出すしほに茶をさし出し。詞イヤ申しお辰様、なれくしいがお前へちこお頼み申したい事がござんす、何ぞ私に頼まれて下んすまいかさうらさへば、立直つて襟かき合せ。詞玉島の田舎に住むでも一寸徳兵衛の女房でござんす。頼むとあれば一寸でも後へよらぬが夫のしにせ、引きはせまいマアいふて見さんせ。マア忝いお禮から申します。定めて徳兵衛さんの話で聞いてござんせう、和泉の國濱田の御家中、玉島兵太夫様さいふお方

の御子息礎之亟様さいふむ、様子あつて町奉公なされてござつた所に若氣の至りて人を、マア大阪に聞かれぬ首尾。今も今こてかけさせまする相談。此お方をどうぞマア、私の方へ預りましょ。アノ預つて下んすかそこを引かぬが一寸が女房、殊に其親御の兵太夫様へ付いてはちつさちにも由縁もあり、預つて連れまして歸りましょ。そんならさうして下さんせ、ア、落付いた落付いた。テエ呼びまして來ませうと、立つを釣船、コリヤ待て女房、詞女賢しうて牛賣れぬと、要らざる己も差配、頼んでよけりや俺も頼む。礎之亟殿をお辰殿へ預けては此三婦の顔も立たぬ。サア其所を外へ預けるが彼方のお爲。マダぬかす男の一分捨てさす

か、面汚さすかたわけめと、叱り飛ばされどもぢんぐ。うぢんぐ。徳兵衛女房聞咎め。詞イヤ三婦様、無理に頼まれたうていふではないむ、私共其人預ればお前の男が立たぬは何うして、但し女でまさかの時役に立たぬと見すえてか、まんざらひぢりかすりやくふやうなアイ女子でもござんせぬ、一旦たのむのたのまれたさいふたからば、三日でも預られれば私も立たぬぞへ。立て、下んせ親仁様と、辛い女房の言葉の山椒、茶びん頭を動かす。詞イヤどういふても預けては此三婦が男が立たぬ、サア其立たぬ譯聞かう。いかさま夫には様子があらう夫やマア何うして立ちませぬ。ホ立たぬさいふ譯は内儀の顔に色氣もある故、徳兵衛も思はう

にも、三婦さいふ者はよい年をして不遠慮な、身に火の付いたが切ないさて、若い女房に若い男を預けてやつたは聞えぬと、思ひばせまいか又思ふまいものでもない。あなうちこなたに限つて爾うした事はあるまいけれど、分別の外さいふことあるに依つて、又疑ふまいものでもないが。ないことじや〜。ないことじやに依つて、結句戸が立てられぬ、腹立つまいぞや〜、いつそ此方の顔が歪んであるか半分削けても有つたら、徳兵衛も何とも思ふまい、また世間も濟む。俺や誓文コレ此數珠にかけ預けたい〜、此方の根性見据えたに依つて、か萬々が一徳兵衛が立たぬ事が出来るぞ、俺は勿論九郎兵衛までか、男も頼たる、さいふ事

はあるまいけれど、外さいふ字で預けにくい。マアさう思ふて下されと事を分けたる一言に、連添ふ女房も理に服し、お辰はもさより言葉も出さず、差俯伏いてゐたりしが、何思ひけん立直り、火鉢にかけし鐵弓の、火になつたのをおつ取つて、我れ我手に我顔へ、べつたりあてる焼金にうんさばかりに反りかへる。是は何故何事と、夫婦は周章抱きかへ、薬よ水よと勞れば、正氣付きしかむつくこ起き。詞なんぞ三婦様、此顔でも分別の外さいふ字の色氣があるらうかな。出来した、お内儀、磯之丞殿の事を頼みます。スリヤ預けて下さんすか。唐までなりと連立つて下され。ア、嬉しうござんす、之でわたしも立つた。磯之丞様の親御兵

大夫様は、備中の玉島が御生國、徳兵衛殿の爲にも、わしが爲にも親方筋、其御子息様を預からいでば連合の男も立たず私も主へ立たぬに依つて、親のうみつけた満足な顔へ疵付けて預かる心、推量して下さんせよ語を聞いてお次も涙、三婦も涙の横手を打ち。詞ハテ徳兵衛は頼母しい女房を持つたなア、なぜ男には生れて來ぬぞ、可憐物を落して來た。ソレ女房共奥へ伴ひ磯殿にも引合せ備中へ下さ心拵へ。お内儀、疵は痛みはしませぬか。何のいな我手でした事、チ、恥しい袖掩ふぞ。惜しや盛りを散らせし三婦も女房はいたはりて、一間へ、Mこそは連れて行く。早や暮近くなまなれの、立つるでもなし横に出る、男仲間の跳ね

出され、こつげの權まこの八、獅子に雇はれ赤頭、せんまの形を其儘に、三婦殿内にか宿にかま、つき聲やり聲にじり込む。詞ホコリヤ二人なむら祭の形、まだ仕廻すか、呑み來たか。今看經しかけて數珠の手が放されぬ、そこらに樽もあう一盃せい、南無阿彌陀、膳棚に啗あうぞ、なむあみだ佛、夫を看ま口ではぶつ、つまぐる數珠を挨拶を取混ぜ、後生佛性。こなたは牛頭馬頭惡鬼株、膝打たいて。詞八よ親仁に今の言をかい。ハテぶつ、を聞いて居よりいひ出せ、コレ三婦殿、二人が連立つて來たはこなたに貰ふものが有つて來た。花が欲しい、花くだけ、ヤア、何じゃ、花をくれい。へエ扱は留守の

間に山車でも持つて來たな。チ、獅子持つて來て美しい花を見付けて置いた、さる侍に頼まれ其花を貰ひに來た。ナ八よ。それ、つひつかんで來て進ぜうさいふて、お侍を宮の内待たして置いた。前なら腕づくで貰ふけれど、白髪の生えた人をさうもなるまい。但しこみずいふて見る氣か、金にでもする氣か、仕掛ける喧嘩を數珠でまぎらし。詞エ若い者さいふ物は、づば、こたしなめ。わいらは住吉で始めてあふて夫からの出合。まう根性が直つたと思ふたが、フム其侍さいふは大鳥佐賀右衛門さいふわるであらうがな。マアそんな物。コリヤ去んで云はうには、琴浦には磯之丞さいふて歴きとした男がござるさ行んでいふ

てくれ、コナ親父は、おいらを子供
 のやうに思ふさうな。チ、俺の目か
 らは蝗のやうに思ふ。ドリヤそんな
 ら擱んで行のかさ、立上つて兩人が
 奥を目懸け駈入る所に、襖さつと押
 明け、脇差下げて三婦が女房。詞コ
 レこちの人、私や先きから聞いて
 るたが、こんな様もう堪忍がなるまい
 の、嬢五六年願ふた後生を無にして
 いつそ切つてしまはざるまい。チ
 そんな事もよござんしよ、が、あん
 まり夫は不便なこどもあり。イヤ
 こんな時切らざ切る時もあるまいと
 云ふに二人はうちくきよるく、
 性根を据えて身を固め。面白い切ら
 れう、腰立たぬ老書切りはづさし
 て臺座後光、仕舞ふてくれうと兩方
 より、サア切れくさせかみ立て、

入身になつて待ちかくれば、三婦は
 すつくま立身になり、詞かまふ是非
 がない切つてしまを。ヤ夫は。イヤ
 俺が切るは此數珠さ、ふつり切つ
 て後へ投げ、サア是からが元の釣船
 己等に及物が要らうかさ、はつしは
 つしと踏み倒し、尻引からげ、詞ド
 レ其脇差。ハテまう及物は要らぬで
 ないか。イヤ此がらくためは爪にも
 立たぬ、根ざしの侍めをばらして仕
 舞ふ、男の丸腰も見苦しいと、大だ
 ら腰にぶつこむ所を、ごつこいさう
 ばさ右左、擱み付く腕ぐつと捻上げ
 詞か、嬢侍に逢ふて來う。チ、行てご
 ざんせさやる女房、行く男より氣の
 強さ、そこへ押出した跡びつしやり。
 三婦に二人を引立て、宮の内へこ
 つれて行く。奥はしばしの別れぞと

琴浦に呑込ませ、酒酌みかはす折か
 らに、表へ來るは九郎兵衛が舅三河
 屋の義平次が、駕籠釣らして戸をこ
 さく、誰じやさいふて明けに出る
 詞ホ三婦殿の御内室、此中であひま
 せぬ、何時見ても健さうな、お前も
 達者で珍しい何と思ふて。サ年よる
 息子に使はれます、九郎兵衛がいふ
 には、此中から悪者どもに頼まれて
 琴浦殿を盗まんぞ念がける、定めて
 三婦も心遣ひ、四五日こちへ取込ん
 でおいたら、燈臺元暗しと氣が付く
 まい、女夫の衆の氣やすめに、迎ふ
 て來いさいふて駕籠までおこしまし
 た。是までいかい世話を取繕るへば
 ナンノお禮に及ぶこと。詞今も今こ
 ていけずめがわつばさつば連合は其
 出入にいかれました、いかさま二三

日此家をあらけ、彼奴らに鼻明かすも魂膽。九郎兵衛様も其胸で、俄の迎ひでござんせう。舅御のお前に渡すはたしか、奥にじや呼んできませうと、つひ立ち入れて義平次は、駕籠の衆待つて貰ばうと、門につくばり人顔の、見えぬを首尾さ待ちゐたり。奥は盃とり納め、伴ひ出で、琴浦が、そんなら私も三婦様や、九郎兵衛様に譯いふて、後から行くが合點か。チそりや其時私も又迎ひに来るも辰が挨拶、磯之丞もこもんに一時には目立つ故、猶以つてつれては行かれぬ、兎角彼の衆のいふ様に、宥めて別れ女郎は駕籠、磯さお

辰は船場へと、立ち出づれば、三婦が女房。詞義平次様渡したぞ、お二人様も御無事で、暇乞も挨拶も、互ひの思ひ暮過ぎて、又の便を松屋町南さ北へ引わかれ、足早にこそ歩み行く。宮には喧嘩くも騒ぐ中、若い者共聲々に、詞親父殿、まうよい、高が逃げる侍を相手にするは大人氣ない。マア去なれい戻られない徳兵衛九郎兵衛諸共に、三婦を宥め歸る店先。女房立つてコレ皆様。詞出入の濟口どうじやんと、こちらの退けでござんせぬか。年寄だけで氣遣ひなき、問へば徳兵衛いかなかな、詞昔に變らぬ達者なち、八

ご權さば蓮池へ、何の苦もなくごんぶりいはいせ侍はふみつけた。チそんなら入らんせ、祝うてわつこ酒にせう。コリヤ女房氣が付いた、徳兵衛には取分けて内儀の事を話さやならぬ。九郎兵衛にも安堵さそ。サアまあ奥へご先に立ち、ごりや内儀の御馳走を、食べて行のかご徳兵衛は、伴なひ一間に入りける。跡に九郎兵衛立止り、詞お内儀、琴浦殿や磯殿が見えぬが、ごこへいかれたか。さればいな、どうやらそぶぐいふに依つて、お辰さんに預け、磯様は備中へ遣り、琴浦様はたつた今お前の方から迎ひに来た。ソリヤ誰

が、ハテ親仁様が見えて九郎兵衛が
 いひまする、四五日戻して下されこ
 駕籠持たして迎ひにお出で。ヤアヤ
 アあの、此九郎兵衛が云ふさいふて
 舅の親仁が連れて行んだか。チイノ
 シテ、其駕籠はごつちへ。たしか
 南の方へ。夫遣つてばと駈出すを、
 コレ待つた氣遣ひな。詞迎ひに來た
 事お前は知らずか、知つた知らぬは
 後の事。イヤ夫聞かぬ中は。エ、面
 倒なさればし、舅の跡を九郎兵
 衛は息をはかりに、三重追ひかくる

(床本) 長町裏の段

神と佛と荷ひ物はやし立たる下寺町

高津青宮の賑に紛れて急ぐ舅義平次
 かこの熊を細引でくる、卷の俄網
 追立行を後よりもチ、イ、呼びか
 け飛くる舞の九郎兵衛なむ三寶き横
 切れにあせ道行けば追つじきかこの
 捧つかんで鼻中ごうご打すへごつか
 ごすわりほつご一息つきあへすコレ
 申親仁さまこの女中は知つての通り
 恩有る方からの預り人それをこなた
 がごこへ連れてござるこれやてつき
 りと悪者に頼れ金にする氣で有ふが
 そふしられてはこの九郎兵衛が顔が
 立ぬわるいぞへ、此中も内本町の
 道具屋で田舎侍に立立麴香爐を以て
 五拾兩のかたりをへエ、見さげ果た

五拾兩のかたりをへエ、見さげ果た

重てきつごさいふてからむ嗜む心も
 有まいコレ駕の衆太儀ながら其駕後
 へ戻してご昇上、すればコリヤ待て
 九郎兵衛嗜む心が有るまい見さげ果
 たごは悉い其あいそづかしを待て居
 たはい六年このかたおれか娘を女房
 にして慰物にしてゐるサア揚代もら
 ふヤイ爰な恩しらすめ儂は元宿なし
 團七さいふて粹方仲間の小あるき貫
 喰で暮しておつたを引上て堺の濱で
 魚賣りさせまだ其上に娘のおかちを
 て、くり市松さいふ子迄へり出さし
 おつた。月々のあてがい取るむよさ
 に目を眠つて居る中乳守の町で喧嘩
 仕出し和泉の牢へかまつて百日の上

仕出し和泉の牢へかまつて百日の上

女房子をたむ養ふたと思ふサア夫れ

は皆其元様のお世話ぬかすな。せめ

て其入り目を入合そふと思ふてもう

け事にかゝれば儂れが道具屋の内に

おつてよふぼく上さしたなアイヤ夫

は其場のつゐ。まだぬかすかけふ琴

浦をちよるまかしてきたのは惚れて

居らるゝ佐賀右衛門殿へ渡し金にす

る氣イヤサ夫では顔が立ぬか、アノ

ながくおまがいを養ふてゐた此此

此顔が立ぬか但しこちらの此、此、此

ほうげたが立ぬか足蹴にはつたこ

けられても舅は親ご無念を懲へ齒を

喰しぱり居たりしが兎角訛るにしく

はなしさもみ手の上に膝折かめ段

々の仰一つとして返す詞もござりま

せぬ。ながくのお世話の上又して

は金儲けを妨お腹の立は御尤もうふ

つゝりさお邪魔は致しますまい。が

あの女中の事計りはイヤならぬ、サ

ア素手でお詫も申すまい友達共が

頼母子を致してくれまして爰に參拾

兩ござりますれば是をお前へ渡しま

しよ身の代に取つたと思召し琴浦殿

を三婦が方へ戻して下され。外へや

つてはこの九郎兵衛が顔もごふも立

ませぬ情じや慈悲じや親仁様一生の

御無心申、申コレ申さ手引き袖引き

膝をつき無念涙の男泣親さいふ字は

是非もなや義平次も參拾兩當分取に

少しはやばらき琴浦をあつちへ渡せ

ば百兩がもの髓に有れ共かゝりやつ

なむる娘の縁たいやつたと思ひ參拾

兩で戻してやるヤコレ駕の衆今乗つ

てきた所まで駕を戻して駕代も存分

先で取れいゝ惡る氣付くればこんな

時よいれだり取サアいゝさきほひい

さみの駕の者きた道へ又荷ひ行く。

サア約束の參拾兩受さる渡せのさい

そくにイヤ其金爰にはござりませぬ

宿へ歸つて才覺さ立たんとするを飛

かゝりがんづか摺んで引たをしエ

腹の立くくくくく。むまく

さ一ばい。何の申左様ではござりま

せぬ、内に歸れば心當てままあく

く爰を放して。ヤアどこへ〜うぬが様なまいすめはかふして腹あよふかイヤかふしてくれうかされぢ廻し引廻し踏たり蹴たりあげくには砂にすり付け石に打付け引廻し〜引廻されても手向ひのならぬも無念さ口惜さこたへかぬれば其つら付何じや肩ひぢはつて其眼付き何じやコリヤヤイ舅は親ア、慮外なむら親に向つて白眼けつぶすぞよ。無念なか口惜いかム、泣くかかばいやなアさすりいぢめてやるふこのせつたのはかくらへさにじり付られはきしみはぎり、すかしながめて、おのりや脇指さいてびこ付か面白いきられる

どこへ後へ寄りおると付け廻して引さらへ。見こま此赤いはしでやつて見るかま持そへ引抜き、サア是で切れ〜サア〜切ぬかやい何のわたしがおまへを、イヤ切る氣で有ふ、〜切られう切つて貰ふ一寸切たら一尺の竹鋸で挽返すサア切て見よつて見よま指付け突付けもがき取らん〜せせり合ふ中思はず舅の耳の根ずつかりヤレ人殺しよ親殺しよ呼る聲に折よくも祇園ばやしのたいこかれ、九郎兵衛は殺す氣もないに因果と舅の大聲切つた〜ご人寄せの聲を留んと又さつぶり。あたりほそりを見廻してうる付中につかみ

付横にはらへば又すつぱり人はこぬかま氣もそゆる松の内行く提灯のあかりがいやさにごつきりの音ははやしに紛れても紛れぬ命のおわり際うんと返れば是非なくも取つておさへてまゝめの及ぐつささしこむ其内に間ぢかく聞へる御興の太鼓死骸を池へ投込〜血汐を流すはねつるべくむ水則三途八難我身にかゝる罪さむをあらひ落せごにこり井の水より清き夏神樂ちやうさよふさの御興の像は幸ひに紛れ込還出たる千歳樂萬歳樂や極樂橋命のせさの札の辻八丁目へこそ紛れ行く。



十種香の段

越名改メ

人形

上杉謙信	原小文治	武田勝頼	濡衣	白須賀六郎	八重垣姫	野澤吉貞	野澤吉芳	野澤吉左	野澤吉彌	竹本南部太夫
吉田玉治郎	吉田文作	吉田扇太郎	吉田小兵吉	吉田光之助	桐竹紋十郎	野澤吉貞	野澤吉芳	野澤吉左	野澤吉彌	竹本南部太夫

第四 本朝廿四孝

十種香の段
狐火の段

この淨瑠璃は武田上杉兩家の確執に齋藤道三の謀叛を取合せたるにて『信州川中島合戦』『三軍桔梗く原』等を藍本として更に趣向を立て技巧を凝らしたるものにて近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作で演ば明和三年正月興行の竹本座。十種香の段より狐火迄は四段目の切でこの段に織込まれたるところを申ますと、上杉武田兩家和睦の爲て義晴の後室手羽女御前が勝頼と八重垣姫とを許嫁とさせます。大切には道三が滅亡し、勝頼八重垣は芽出度夫婦になるのです。十種香の場

勝頼は實の勝頼で先に切腹したのは花造りの簀作であつたのです。仍ち其處に取替子の面白さが湧いて來るのです。濡衣は簀作と通じてゐました。濡衣は齋藤道三の娘であります。道三は菊造りの關兵衛で上杉へ忍び勝頼も亦花作りになつて上杉へ忍び入つてゐたものです。狐火の氷渡りの事は支那西湖の故事であるのを諷訪湖へ持て來たものであります。

(床本) 十種香の段より狐火まで

行水の流る人々の裳作が、姿見かけす長上下、悠々として一間を立出で、詞我民間に育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作りになつて入込みしは、幼君の御身の上に、若過ちやあらんか、餘所ながら守護する某

それと悟つてか、へしや、ハテ合點の行かぬささしうつむき、思案にふさがる一ト間には、館の娘八重垣姫許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日より。一ト間所に引籠り、床に繪姿かけまくも、御經讀誦の鈴の音、こなたも同じ松虫の、鳴く音に袖も濡衣が、今日命日の、甲ひの位牌に向ひ手を合せ、詞廣い世界に誰あつて、お前の忌日命日を、甲ふ人も情なや父御の悪事も露知らず、お果なされたお心を、思ひ出す程おいとしい、嗚や未來ば迷ふてござらう、女房の濡衣を、心ばかりの此手向、千部萬部のお経ぞ、思うて成佛して下さいせ、南無阿彌陀佛くく。誠に今日ば霜月廿日、我身替りに相果し勝頼も命日、暮行く月日も一年餘り

南無、幽靈出離生死頓生菩提、詞申し勝頼様、親と親との許嫁、在りし様子を聞くよりも、嫁入する日を待兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添臥しの、身は姫御前の果報ぞ、月にも花にも樂しみば、繪像の傍で十種香の、煙も香花となりたるか、回向せうとてお姿を、繪にはかゝしはせぬものを、たましひかへす反魂香名畫の力もあるならば、可愛さたつた一ト言の、お聲が聞きたい聞きたいと、繪像の傍に身を打ふし、流涕りがれ見え給ふ、詞あの泣き聲は八重垣姫よな、我名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、甲ふ姫と甲ふ濡衣、不慙さともいちらしとも、云はん方なき二人が心さ、そゝる涙にくれ

けるが、詞ア、我なむら不覺の涙さ襟かき合せ立上る、後にしよんぼり濡衣を、詞申し裝作様、合點のゆかぬばあなたのお姿、ごうした事で此やうに。オ、不審尤、はからずも謙信に、かゝへられたる衣服大小。テモ扱も、衣紋付きなら上下の召様まで、似たさはおるか矢張其まゝ、かたみこそ今は仇なれこれなくば、忘るゝ事もありなんこ、讀みしは別れを悲しむ歌、かたみさへごやに我夫に、みちん變らぬ此お姿、見るにつけても忘れぬ、詞私や輪廻に、迷ふたそうな、御ゆるされてさ伏沈む、泣聲もれて一間には、不審立聞く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、姿見紛ふ方もなく、ヤア我妻が勝頼様と飛立つ心を押沈め、正しうお果

なされしもの 似たと思ふは心の迷
繪像の手前も恥しと、立戻つて手を
合せ、御経讀誦の鈴の音。勝頼公は
濡衣が心を察して聲曇り、詞はかな
き女の心から、歎くは理り去りなが
ら、定めなき世と諦めよと、諫むる
詞こなたには、心空なる其人の、若
やながらへおはすかこ、思へば戀し
くなつかしく、又覗いては繪姿に、
見比べるほご生寫、似はせて矢張り
ほん／＼の、勝頼様ぢやないかいの
と、思はず一ト間を走り出で、續り
付いて泣給へば、はつと思へごさあ
らぬ風情、詞こは思ひ寄さる御仰せ
我等糞作と申す花作、漸々只今召し
かへられ、衣服大小改めし新参者
勝頼は覺えなし、御龐相あるなご
突放せば、詞、何と云やる、今父

上にかへられし新参者、花作の糞
作さや、自さした事が、餘りよう
似た面ざしの、もしやそれかご心の
煩惱、二人の手前恥しなむら、詞
レ濡衣、此糞作さやら云ふ人を、そ
なたは疾うから近付きか。エイ。い
やいの、知る人であらうかの。アノ
お姫様さした事が、たつた今見えた
お人、なんのまあ私か。イヤ隠し
やんな今の素振、忍ぶ戀路さいふや
うな、可愛らしい仲かいのこ、思ひ
もやらぬ詞に悔り、詞オ、お姫様の
仰有る事わいの、人にこそよれ、な
んのあなたに勿体ないご云やるから
は、ごうでもそなたのしるべの人か
イ、エ、さうではなけれ共、大事の
お主の目をかすめ、忍び男を拵へる
は勿体ないご申す事で御在ります。

ム、すりやしるべの人でなく、殿御
でもない人なら、ごうぞ今から自
を、可愛がつてたもる様、押付なむ
ら媒を、頼むは濡衣さま／＼と、
夕日まげゆく顔に袖、あでやかなり
し其風情、詞オ、お姫様さした事
まだお子達ご思ひの外、大それたあ
の糞作殿を。サア見染めたが戀路の
始め、後ごも云はす今爰で、媒
いと仰有るのか。我折れ、ほんに大
名のお姫御さて、油断はならぬ戀の
みち、品によつたらお取持ちいたし
ませうか。コレ、濡衣、必らず塵
相云ふまいぞ。サア何もかも私か吞
込んで、ナ、吞込んでお取持すまい
物でもないが、眞實底から糞作殿に
御執心でござりますか、ご問はれて
猶もあからむ顔。勤する身はいざし

らす、姫御前のあられもない、殿御に惚れたま云ふ事が、嘘、偽に云はれうか、詞其お詞に違ひなくば、何ぞ適な誓紙の證據、それ見た上でお媒。オ、それこそ心易い事、其の誓紙さへ書いたらば、詞イエ／＼夫もこつちに望むある私か望む誓紙と云ふは、諏訪法性の御兜、それが盗んで貰ひたい。ヤア何と云やる、諏訪法性の御兜を、盗み出せと云やるのは、扱てはあなたが勝頼様、と云ふ口押へて、詞ハテ滅相な勝頼呼ばはり、みちん覺のない装作、産惚ばしのためふなと、云ふ顔つれ／＼打守り。許嫁計りにて枕交さぬ妹眷中、おつみあるは無理なられど、同じ羽色の鳥つばき、人目にそれと分られど、親と呼び又つま鳥と呼ぶ

は、生あるならひぞや、いかにお顔が似ればとて、戀しと思ふ勝頼様、そも見紛うてあられうか、世にも人にも忍ぶなる、御身の上と云乍ら、連添ふ私に何遠慮、つかう／＼と御身の上、明して得心さしてたべ、それも叶はぬ事ならば、いつそ殺して／＼と、縋り付いたる恨み泣き、勝頼わざと聲あら／＼げ、詞ヤア聞きわけなきたばふれ事、いかほどにのたまふとも、覺えなき身は下司下郎餘所の見る目もはかりあり、そこ退給へと突放せば、詞スリヤ何の様に申しても、勝頼様ではおはさぬかハア、はつこばかりに装作が、差添逆手に取給へば、こは御短慮と止むる濡衣、詞イヤ／＼放して殺してたも、勝頼様でもない人に、戯れ事

の恥かしや、心の穢れ繪像へ言譯、ごうも生きては居られぬと、又取直すを猶も押留め、詞オ、遠は武家のお姫様天晴なるお志、其お心見るからは、勝頼様に逢はせませう。ソレ、そこにござる装作様も、御推量に違はず、あれが誠の勝頼様、ちやとおあひなされませと、突やられてはさすがにも、始の恨み百分一、聞えませぬが精一ばい、後は互に抱付き、つい濡初に、濡衣も心どきつき折柄に、父謙信の聲として、詞装作は何れに居る。搦尻への返答、時刻移ると立出れば、はつこ装作飛しさり、詞御支度よくば直様參上ホ、委細の事は此の文箱に、返事も早く罷越せ、はつこ領掌文箱携へ、搦尻さして急ぎ行く。謙信後を見送つて

詞ヤア／＼者共、用意よくば早來れ
と、仰せにはつご白須賀六郎、原小
文治、更科なんごの譜代の郎黨、御
前にすゝめば謙信勇んで詞今此諏訪
の湖に、氷閉れば渡海は叶はず、
搦尻迄は陸路の切所、油斷して不覺
を取るな、ハア畏り奉るご、勇
み進んでかけりゆく。
後に不審ば八重垣姫、申し父上、こ
ご／＼しい今の有様、何事やらんご
尋れば。詞ホ、あれこそは、武田勝
頼討手の人数、何に勝頼様を討手ご
は、コハそもいかに何故ぞ驚く二人
をはつたご暇め付、訪敵法性の兜を
盗み出さんうねらが巧み、物かげに
て聞いたる故、勝頼に使者を云付け
歸りを待つて討取さんご、謀合はせ
る討手の手配エイそんなら今の討手

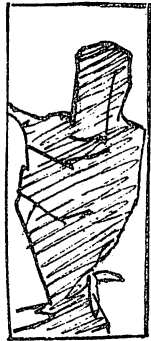
の者は、勝頼様を殺さん爲か、ハア
はつごばかりにござ伏し今日は如
何なる事なれば、過ぎ去り給ひし我
夫に再び逢ふは優曇華と、悦んで居
たものを、又も別れになる事は、何
の因果ぞ情けなや、父のお慈悲にお
命を、ごうぞ助けて給はれご、口説
き歎くに目もやらず、詞ヤア武田方
の廻し者、憎き女ご濡衣引たてうぬ
には尋れる仔細あり、奥へ失せうご
小腕ごり、情用捨もわら氣の大將、
帳臺深く入り給ふ。思ひにや、焦れ
てもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、
狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火さ
よふけて、幾重もれくる爪音は、君
をもうけの奥御殿、こなたは正体涙
ながら、詞アレ／＼奥の間で檢校が
諷ふ唱歌も今身の上、おいさしいは

勝頼様かゝる巧みのあるごごも、知
らずばかりに御身の上、別れごなる
もつれない父上諫めても、歎いても
聞入れもなき胸愆人、娘不惑ご思は
すならお命助けて添はせてたべご、
身を打伏して歎きしが、詞イヤ／＼
泣いてゐられぬ所、追手の者より先
へ廻り勝頼様に此事を、お知らせ申
すご近道の、訪敵の湖船人に渡り
頼まん急がんと、小襦取手も甲斐
／＼しく、かけ出せしが、イヤ／＼
／＼、詞今湖に氷張詰め、船の往
來も叶はぬよし、歩路をいては女の
足、なんご追手に追つかれう、知ら
すにも知らされず、みす／＼夫を見
殺しにするは、いかなる身の因果、
詞ア、翅ごほしい、羽ごほしい。こ
んで行きたい知らせたい逢ひたい見

たいと夫戀ひの千々に亂るゝ憂き思ひ、千年百年泣きあかし、涙に命絶ゆればさて、夫の爲にはよもなるまじ。此上頼むは神佛と、床に祭りし法性の兜の前に手をつかへ、詞此御免は諏訪大明神より武田家へ、授け給はる御寶なれば、取も直さず諏訪の御神、勝頼様の今の御難儀、助け給へすくひ給へと、兜を取て押頂き押頂きし佛の、もしやは人の咎んと窺ひ下りる飛石傳ひ、庭の溜の泉水に、うつる月影怪しき姿、はつこ驚き飛退しが、詞今のは慥に狐の姿此泉水に寫りしはハテめんようなきとぎつく胸を撫でおろしく、こはく／＼ながらそろ／＼と、さしのぞく池水に寫るは己も影ばかり、詞たつた今此水に寫つた影は狐の姿、今又

見れば我が佛、幻と云ふ物か、但し迷ひの空目とやらかハテ、怪しやとつおいつ、兜をそつと手に捧げ覗けば又も白狐の形、水にあり／＼有明月、不思議に胸もにこり江の池の汀にすつくりと、詠め入つて立ちたりしが、詞誠や當國諏訪明神は、狐をもつてつかかばしめと聞つるが、明神の神体に等しき兜なれば、八百八狐つき添ひて、守護する奇瑞に疑なし、合カイそれよ思ひ出したり、湖に氷張詰むれば、渡り初する神の狐其足跡を知邊にて、心安う行きこう人塙、狐渡らぬ其先に渡れば、水に溺るこは、人も知つたる諏訪の湖たこへ狐は渡らすこも、夫を思ふ念力に神の力の加はる兜、勝頼様に返へせとある、諏訪明神の御教へ

ハア、忝や有難やと、兜を取つて頭にかつげば、合念ち姿狐火のこゝにも燃へ立ち合かしこにも合亂るゝ姿は法性の、兜を守護する不思議の有様、こなたの間には手嬭女御前、始終の様子窺ふ共、いざしら菊の花番小屋にさつくさ關兵衛が、つけまはしても神通力、花のまに／＼見えつ隠れつ神さる狐、南無三寶とせき立つ關兵衛、ねらひの的は手嬭女御前、どつさりひやく鐵砲の、音を相圖に遠近より、俄に響く鐘太鼓亂調に打ち立てば、騒かぬ關兵衛廣庭に仁王立、ほごなく馳來る雜兵輩、我討取らんさひしめいたり、詞ヤしほらしき有財餓鬼、此世の暇さらさんさ、だんびらするりも抜放し、あたる任せになぎ立て／＼御殿をさして三重門追て行く。



第五 伊達娘戀緋鹿子

八百屋お七火の見櫓の段

お七火の見櫓の段

竹本源路太夫
鶴澤友衛門

人形

娘 お 武 兵 七 吉田文五郎
杉 衛 桐 竹 門 造
作 桐 竹 紋 太 郎
吉田榮三郎

この淨瑠璃は「潤色江戸紫」を改作して安永二年四月北堀江座に上演されたのが初演で作者は菅専助、松田和吉、若竹笛躬でこの段は六段目の切になつてゐるこの内容を申上げますと吉祥院の小姓吉三郎は故主左門之助が殿から預かつた天國の劔を期日中に探し出せない咎によつて切腹せうとします。吉三郎も殉死をせねばならぬので豫て契りを結んである八百屋お七の許に赴きそれなく別れを告げよふとして行く八百屋ではお七に戀慕してゐる武兵衛から少からの借金をしてゐるのでお七

に因果を含めて無理に武兵衛と夫婦になれと強要します。椽の下へ忍んでゐた吉三郎はこれを聞いてゐて書置を殘して出て行きます。後でお七は悔りしたか天國の劔は武兵衛が所持してゐるので策を以てこれを奪ひ吉三郎の命を救ふために、お松も吉三郎の許へ届けやうとしますが夜中町には木戸が閉つてゐますので、お七は罪を覺悟で火の見櫓に登つて半鐘を鳴らし火事を偽つて木戸を開かせるといふ筈でこの火の見櫓の場のお七の人形は吉田文五郎が絶品としてゐるところであります。
(床本) 八百屋お七火の見櫓の段
跡にお七は心も空、廿三夜の月出ぬ中、体は爰に魂は、奥に表に目配り、餘所の歎きも白雪に、冴え行く

遠寺の鐘かうく、響き渡れば詞ヤ
 ア彼鐘は早九つ、夜中限りに江戸の
 門々を締めれば、大切な用ある人も
 往來ならぬ殿しいお觸れ、假令劔か
 て手に入つても今夜中に届ける事か叶
 ばれば、吉三様は矢張切腹。ハア悲
 しや是りや何とせう如何せうと立つ
 たり居たり氣はそやる、更け行く空
 の怨しく、鐘鳴る方を睨み付け、拳
 を握り齒をかみしめ、只うつさりに
 立つたりしが、ふつと氣の付く表の
 火の見。チ、然うじや、アノ火の見
 の半鐘を打てば、出火と心得、町々
 の門を開くは定、思ひのまゝに劔を
 届け、夫の命助けいで置かうか。鐘
 を打つたる此身の科、町々小路を引
 渡され、焼殺されても男故、少しも
 厭はぬ大事無い、思ふ男に別れては

所詮生きては居ぬ体、炭にもなれ灰
 さもなれど、女心の一筋に、帯引締
 めて裾引上げ、表に駈け出で、四辻
 に咎むる人も嵐に凍て、雪は凍りて
 踏滑る、合橋子は即ち劔の山、登る
 心は三惡道の通ひ道、杉は難無く奥
 の間より、劔を盗んで逃げ来る跡。
 ヤイ大盗人めと駈來る武兵衛、引抱
 へて撈き取る劔、遣らしじと縋るを踏
 飛ばす、ごつこい然うはご取付く彌
 作。是や何ひるごと太左衛門、引擦
 りつくるその手を直ぐに、腕搦みに
 こりや〜〜、彼處は見下す雪の
 屋根、其儘三途の瓦葺、睨む地獄の
 鬼瓦、追立て責むる身の因果、廻り
 くる〜〜〜、下には四人が
 挑む中、お七は難無く火の見の上、
 撞木追取りちやん〜、音より

間も無く爰彼處、一度に打出す警鐘
 の、響きに連れて開く門々、嫌はれ
 た意趣暗し、引縛つて訴人するさ、
 お杉を蹴飛ばし上り來る、櫓子を下
 より打返せば、武兵衛は大地へ眞逆
 様、持つたる脇差取落すを、杉は追
 取り吉三が方、駈け行く跡を追掛け
 る、太左が首筋是ばいなさ、擔いで
 投げ込む用水樋、腰骨折つて蠢く武
 兵衛、お七も飛んで遠近の、人の噂
 と三重なりにけり。